救護班到着に「希望わいた」

医療関係者ら被災地へ

常用薬求め来所

伊豆赤十字病院　丹羽看護師長

東日本大震災で伊豆赤十字病院＝伊豆市小立野＝の看護師長・丹羽君江さん(45)＝伊豆の国市南条＝が、日本赤十字社の救護班の1人（心のケア要員）として被災地に赴き、2日間にわたり14人の診療に携わった。現地の災害対策本部と避難所の情報が寸断され、救護班の到着に「希望」を口にした被災者の姿や延々とかれきが続く惨状を目の当たりにした。

19日午前8時に岩手県釜石市の災害対策拠点に到着し、テントの救護所で診療を行った。翌20日には同県大槌町の小槌地区集会所で活動した。

救護所に訪れるのは、常用している薬を求める人が多かった。「家などすべて流されてしまい、血圧や糖尿、心臓病など毎日服用する薬をもらいに来る人ばかりだった」。1回に3日間分しか処方できないため、必要な被災者は何度も来なければならない。初日、釜石市の救護所には116人が訪れた。

2日目に避難所の小槌地区集会所で話しかけてきた女性は、夫が避難所に逃げたが、その避難所も被害に遭い「黒こげの小さい子どもの死体を見て、夫もだめだとあきらめた」と話した。救護班を見て「希望がわいた」と言った人もいた。この日は26人を診療した。

巡回途中の街並みはがれきの山。「道は確保されていたが、途中で降りると土ぼこりが口の中に入ってきた。何ともいえない焼けこげたにおいも立ちこめていた」。

災害対策本部と各避難所の情報伝達が不十分だと感じたという。帰りの車では「これで良かったのか、もっと何かできるのではなかったか」と救護班の全員が自問自答したという。「要請があったらまた現地で役に立ちたい」と丹羽さんは決意を語った。

スライドで被災地の状況を報告する医師＝三島市八反畑の三島共立病院

がんばれ東北　生かそう教訓

継続的支援が必要

三島共立病院　医師ら5人を派遣

東日本大震災の被災地支援に医療スタッフを派遣している三島共立病院（矢部洋院長）は28日、任務を終えて戻った医師らの支援報告会を三島市八反畑の同病院で開いた。参加した医師、看護師らは不足する医薬品、スタッフ、深刻化する避難所生活の実態などを説明し、継続的な支援の必要性を訴えた。

同病院は、19～22日の第1次隊に看護師と介護士ら3人、23～27日の第2次隊に医師と事務員の2人を宮城県に派遣。仙台市の坂総合病院と多賀城市の避難所で、阪神大震災を経験している神戸市の医師ら各地から現地入りしている医療関係者と協力し、被災者の診察、看護、相談、ボランティア作業などに当たった。

第2次隊に参加した一瀬隆広副院長（外科医）は「避難所は衛生状態が悪く、被災者にはインフルエンザにかかった人も多い。医薬品が不足しており、慢性的疾患を抱えている高齢者に薬もあげることができない」と被災地の厳しい現状を報告。「心に大きな心の傷を負った子も多い。専門医らによる心のケアを行っていかなければならない」と述べた。看護師らは「家や家族を失い退院できない入院患者がいる」「最後まで見棄てない被災者に寄り添う支援が求められる」などと支援継続が必要との見解を示した。

同病院は引き続き、医療スタッフを被災地に派遣していく方針。